

レシテーションを中心に据えた TOEIC 系授業

三熊 祥文

(平成26年10月31日受付)

A TOEIC-oriented English course based on recitation

Yoshifumi Mikuma

(Received Oct. 31, 2014)

Abstract

This paper is a classroom practice report featuring HIT's required sophomore English course. "Special English A" is intended to prepare students for the TOEIC test. Unlike the classes taught by professors who use TOEIC-oriented materials, I decided to take a "presentation-oriented" approach: that is, recitation. Recitation is a performing art where the speaker normally recites a poem or some other kind of rhetorical work from memory. Believed to be effective in improving the learner's oral-aural abilities, it has long been used as a gateway to learning a foreign language. For this particular course, I picked as material a speech from the inventory of TED (Technology, Entertainment, Design), which is a series of academic conferences that have gained huge popularity over the last decade or so. After a series of collaborative or cooperative preparation sessions, all the students were required to give their recitations on the penultimate week for a preliminary competition, with the 8 qualifiers proceeding to the final on the 15th week. Feedback showed that at least 65% of the students explicitly voiced approval for a recitation-based approach to learning.

Key Words: recitation, collaborative learning, the MOT approach, TOEIC, festival

はじめに

本学カリキュラムにおける全学共通の教養必修英語科目は、1年次前期「総合英語Ⅰ」、後期の「総合英語Ⅱ」および2年次前期の「特別英語A」である。1年次の2科目は工業系の大学における基盤的なマテリアルである科学技術英語入門の性格を有しており、2年次のもは TOEIC (Test of English for International Communication) を念頭に置いた内容になっている。本論では「特別英語A」に焦点を当て、英語の学習における1つのフェーズである「英文ストック」へのアプローチを、レシテーションという手法を通して模索する。

1. 特別英語 A とは

日本企業のグローバル化とともに、英語によるコミュニケーション能力が、業務を遂行する上で必須となりつつある中、TOEIC スコアを昇進・昇格の必須要件とする制度が日本企業の間にも広まり始めている。また、その入り口では新入社員の採用において TOEIC の受験履歴および一定のスコアの獲得は特に重視される項目と言われる。

そのような事情に鑑み、2年次の教養必修科目である「特別英語A」ではこの TOEIC でのスコアを上げることを狙いとして、1年次の「総合英語」で培った基礎英文法の力をもとに、主にビジネス英語の聴解力と読解力を鍛えることを目的とすることがシラバスに明記されている。ただし、

* 広島工学大学生命学部食品生命科学科

TOEIC でスコアを伸ばすための骨太なアプローチは、あくまでも基本的な英語の構造の理解に基づいた総合的な英語力の向上である。従って、クラスによっては TOEIC に特化したテキストやその他教材を用いずに授業展開をしているケースもある。今回報告する授業が、まさにそれである。

2. レシテーションとは

今回授業の中核として採用した教育学習方略が、冒頭でも記した「レシテーション」である。レシテーションとは、「記憶した文または文章を口頭で再現すること」（小川ほか 1982）であり、その際「書き手の意図を理解し、自身の声と体によって表現する」（緒方 1995）ことが求められる。したがって、単なる棒暗記とは一線を画し、周到なテキスト解釈を伴うドラマツルギーにも通じる創造的な作業である。そのため、近江（1996）のように「レシテーション≡オーラル・インタープリテーション」と見る向きもある。具体的な進め方については、最も簡便かつ的確にまとめられた田邊（1995）を参照する。

その手法に大差はない。まずターゲットを決める。徹底的な理解をはかる。作者の意図をつかみ、活字であればそれに託された音声と呼び起こし、モデルがある場合にはこれを分析する。そして音読。何百回、何千回と意識的な口頭の筋肉運動が無意識となるまで反復する。やがて、肉体そのものが音声に込め始める。自分の声とテキストとの微調整が始まる。この段階は苦痛をとまなう。学習者の多くが、この段階でギヴ・アップしてしまうのも事実である。

だが、レシテーションはこの段階では終わらない。音読前のテキストの解釈に、声を通した身体・感覚面からの解釈が加わり、最終的には模倣から解放された自己の「語り」へと転ずる。それを他者に朗ずることにより、「自己実現」が果たされる。それはそれでりっぱなコミュニケーションなのである。（田邊 1995）

レシテーションの効果は多岐にわたる。上記引用の後半が暗示する外国語学習の枠を超えたユニバーサルなプレゼン力・コミュニケーション力への貢献は大きいと言える。しかし、そのような領域を捨象して引用前段に込められた外国語学習プロパーに関わる部分にフォーカスするならば、

- (1) 特に suprasegmental features（リズム、イントネーション、音変化）を中心とする音声への慣れを生み出し、リスニング力の向上に貢献する
- (2) 英語の型（主として宣言的知識として獲得したもの）を手続き的知識に変換する、あるいはその土台となる

などが具体的な効果として挙げられよう。(1) はそのまま TOEIC の Part 1～4 のスコアアップにつながるものであり、(2) は Part 5 における直接的かつ有効な作用となる。テキストの選び方と、継続の度合いによっては Part 6 以降にも好結果が得られるであろう。

TOEIC への道筋として見るまでもなく、レシテーションは、暗唱という用語で守備範囲を広げればおよそほとんどの英語学習成功者が行ってきた王道といってもよい取り組みである。にも関わらず、手堅い英語教育の専門書にはあまり扱われることがない。その要因の1つには、教科書を用いた通常の授業において扱うには時間的制約から来る発展性の不足があるように思われる。独習、あるいは ESS のような有志の集団による組織的取り組みと相性がよいと受け取られているようである。本論は、したがって、そのような葛藤に対する1つの解答となりうるのではないかと思われる。

3. 今回のテキストについて

3.1. TED (Technology, Entertainment, Design)

2014 年度前期の特別英語 A で扱ったマテリアルは、以下のものである。

Melissa Marshall “Talk Nerdy to Me” 「私に科学を熱く語って！」TEDGlobal 2012・4:34・Filmed Jun 2012
(http://www.ted.com/talks/melissa_marshall_talk_nerdy_to_me)

これは、1984 年に米国に芽吹いた TED と呼ばれるプレゼンテーションイベントにおいて発表されたスピーチである。TED は “Technology” “Entertainment” “Design” の Acronym であり、テクノロジー、エンターテインメント、デザインが一体となって未来を形作るという考えに由来している。ここでは、様々な分野からの気鋭の celebrity たちが「広める価値のあるアイデア (ideas worth spreading)」を共有してくれている。

3.2. テキストの概要

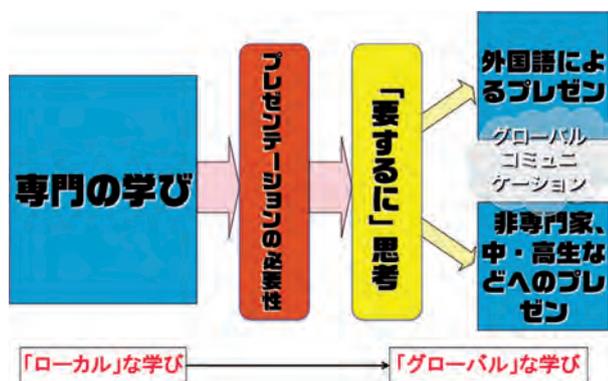
その中から Melissa Marshall のスピーチを選んだのは、その内容がまさに本学の学生のための教訓となりうるとの判断からである。その内容を要約すると、以下の通りとなる。

Melissa Marshall は、ペンシルバニア州立大学の工学部でスピーチを教える教師として、理系／工学系の学生のアイデアは素晴らしいが、専門用語を並べ立てるなどコミュニケーション下手で、門外漢を自分たちの世界に招き入れてくれない、と嘆く。しかし理系／工学系の専門家こそが、

その知見を駆使して社会の問題と向き合っているのも事実。だからこそ、非専門家の我々とのコミュニケーションが大切だと訴え、複雑な科学のアイデアを一般の人に紹介する時に有効となるコツを、比喩を交えながら解き明かす。

3.3. テキスト選択の要因

筆者は、かねてより「グローバル」という言葉を核にアクティブラーニングを中心とする新たな学びについて次のような考えを提示してきた。まず、現状の「グローバル」＝「国際化」＝「外国語」という固定観念は打破すべきである。それよりもむしろ、「ローカル」＝「専門」、「グローバル」＝「専門の開放」と解釈し直すことにより、図1のようなメカニズムであらゆる科目におけるアクティブラーニングと、外国語学習の両立が可能になる。



(図1)

本学のような教育機関においては、それぞれの学科が明確な「専門領域」を持つ。これは「グローバル」を標榜する英語／国際系の文系にはない利点といえよう。しかし、残念なことにその専門領域で生まれる知的財産の分配（コミュニケーション）を評価するならば「符丁（専門用語）」を駆使する「内輸のパーティー（内田 2008）」に留まってしまうことが多い。学んだことは非専門に向けて還元する姿勢を共有することが社会に役立つ人材として育つために必要であると同時に、「非専門」に向けてプレゼンする場面があればそこに「要するに」という思考が生まれ、それが図らずも外国語学習を促進する。例えば「この車両は、重量・強度ともに改善されています」という文を英語で表現する際、「（要するに）この車両は軽量化され、強度も増している」と噛み砕くことができれば“This automobile is lighter and stronger than previous models.”のような、よりの確でなおかつ高校生でも理解できる accessible な英文を産出することができる（佐藤 2008）。このような文脈においてこそ接点が明確に浮き上がって来る「外国語学習とグローバル化」の取り合わせなのである。そして、その路線に乗ったアクティブラーニングの表出形態こそが「プレ

ゼンテーション」である。

いささか脱線したように見えるが、実は上記の論旨は、Melissa Marshall のスピーチの主張と見事に重なるのである。これはまさに本学学生のためのメッセージである。そしてそのメッセージを理系／工学系の学生として自身の口で語らせたい。プレゼンテーションさせたい。「語ることによって、そうならうとする」という構成主義的アプローチを実行に移そうとしたのが、今回の特別英語 A だったと言える。

3.4. レシテーションの手法からみた今回のテキスト

2.において提示したレシテーションのあり方、手法と今回のレシテーション用テキストを重ね合わせてみると、いくつか特筆すべき言語的特徴がみられるので、ここで指摘しておく。

まず前提として言えるのは、日本語における話し言葉と書き言葉の距離感と、英語におけるその明確な違いが、日本と欧米におけるスピーチ文化の浸透度合いを背負うかのように見て取れる。明治時代の言文一致運動を経てもなお、日本語においては話し言葉と書き言葉の違いは明確である。「です・ます体」を用いてさえなお、書いた原稿を読んだり暗唱したりすると「読んでいます」感が色濃く現れ、どこかしら不自然な響きが残る。英語においては、基本的に書いても話しても同じ「英語」であり、違うのはいわゆる「スピーチレベル」である。それがゆえに、例えば20世紀に入って古代ギリシャ以来のスピーチの伝統が大学教育に復活したとされる米国などでは「スピーチの原稿」は文学的言語材料と同等の価値を持つ研究対象として認知されている。日本のスピーチ文化が今ひとつ成熟しないのは、「書かれた原稿」と「実際の発表」の間の乖離感が1つの要因ではないかと推察される。

そのことを念頭に置いた場合、“Talk nerdy to me”は興味深い特徴がある。それは関係代名詞の非限定用法の使用である。一般に文語的で、書き言葉に多い（江川 1991）とされる非限定用法であるが、このスピーチではわずか4分間、600語程度の発表の中で第3パラグラフ（…but tell me that you study trabeculae, which is the mesh-like structure of our…）と第4パラグラフ（…but why not just say “space and time,” which is so much more accessible to us…）の2回も出現する。前者は「自分が研究しているのは『骨梁』についてですが、骨梁とは骨にある網目状の構造のことで、骨粗しょう症の理解と治療のために重要なんです」という意味になる。非限定用法とは一応完結した文の終わりにつけて、先行詞についてさらに説明を加える用法（江川 1991）であるから、上記の文を成立させるためには必須の型の選択となる。後者についても同様で、「（時

空なんたら、などという専門用語は使わず) もっとシンプルに『時間と空間』と言えませんか? その方がずっと分かりやすいんですよ」という内容を表現する際、「分かりやすい」「space and time」と「分かりやすすくない」「space and time」があるという区別が想定されておらず、“space and time”というフレーズの聴き手による理解の成立を確信してから which 以下でその説明を続ける形式になっている。これは非限定用法の範疇である。問題は、いずれの場合もスクリプトとして書き下したスピーチに“,”が記載されており(Appendix 参照),それがごく自然にスピーチとして音声化されていることである。高校まででなされているであろう関係代名詞の指導を創造的に打ち破りつつ、「音声化するマテリアルは読解問題に出てきそうなテキストでも可能なのだ」という指導, もっと言えば「全てはスピーチなのだ。リーディングとスピーキングの間の対立視は無意味だ」という指導を行うチャンスが与えられた教材であると言える。

次に、レシテーションなどの手法を通して声を出すからこそ言葉の選択の意味が分かるという箇所が存在する。同じく第3パラグラフに次のような記述がある。

I want to share a few keys on how you can do that to make sure that we can see that your science is sexy and that your engineering is engaging.

(科学の素晴らしさや工学の魅力を, 私たち門外漢にも分からせるための重要なポイントをいくつか紹介します。)

キーワードは“sexy”と“engineering”である。これらはいずれも「魅力的」「惹き付けるような」という意味であるが, より generic な表現を採用するならば“attractive”が同義語である。なぜいづれにも“attractive”が用いられていないのか? そもそもなぜそれぞれの場所で2つの違う語が用いられているのか? これらの疑問に答える1つの鍵は、「音声化」すなわちスピーチというコンテキストである。まず英語の傾向として, 同じ表現の反復を嫌うというものがある。新聞記事などでは, 下記のような言い換えは頻繁に用いられる。

Michael Jackson を例にすれば, Michael Jackson と繰り返さず,

the singer

the pop singer

the star

the pop star

the King of Pop

the great artist

the entertainer

the celebrity

といった言葉に置き換えられます。

(<http://www.eigo-nikki.com/article/13489706.html>)

このような傾向により, sexy と engineering が使い分けられていると考えられるが, science が sexy であり, engineering が engaging であることには意味がある。それは, いわゆる「頭韻」である。science と sexy は /s/ の音で統一し, engineering と engaging は /en/ の音あるいは“eng”という spelling で統一してある。それぞれのペアを「発音してみればこの組み合わせしかないだろう」というペアにしてあるところがスピーチの教師たる Melissa Marshall の面目躍如といったところであろうか。このような教材は, 単に同義語で語彙を増やすといった「ボキャブラリービルディング」の次元をはるかに超えた「スピーチでなければ実現しにくい」語学学習の取り組みと言えよう。

もう1つ取り上げるならば, 最終段落の数式の利用は見事である。彼女は自身の主張である「箇条書きと専門用語を減らすこと」と「聴き手に関連する話をして受け入れられやすくすること」を, 数式の形を模することにより効果的に表現している。特に秀逸なのは「割り算」の扱いである。「～で割る」という言い回しは, 英語では“divide by ~”と言う。したがって“divide by relevance”ならば「関連性で割る」ということになる。さて, divide するのは何のためであろうか? 宅配ピザをホールで注文したときのことを考えてみれば分かるが, divide するのは“share”するためである。4人家族ならば4つあるいは8つに切り分ける。これが“divide”することである。この理解を上記のフレーズに当てはめると, 「関連性でもってシェアする」すなわち「関連性を用いてシェアする」ということになる。さらに, “share”には先ほど取り上げた一節に

I want to share a few keys on how you can do that to make sure that we can see that your science is sexy and that your engineering is engaging.

(科学の素晴らしさや工学の魅力を, 私たち門外漢にも分からせるための重要なポイントをいくつか紹介します。)

「いくつか『紹介』します」とあるとおり, 「…を〔人に〕話す」という意味がある。とすると「関連性を用いてシェアする」とは「関連性を用いて話す」すなわちその次の行で“…meaning share what’s relevant to the audience”(つまり聴き手に関わることを伝えるということ)と述べられている言い換えに繋がるように台詞が書かれていることが分かる。この工夫により, 主張を数式に「なぞらえる」

ことが可能になっているのだが、この「なぞらえ」というのはスピーチコミュニケーション（レトリック）の理論における Analogy（類推）である。まさにスピーチ教師ならではの作文であり、レシテーションするに相応しい material であると言える。だからこそその選択だったのであった。

4. 授業実践

4.1. 授業情報

(1) 時限：2014 年度前期（火）

1-2 時限（生体医工学科／食品生命科学科）

3-4 時限（情報工学科／知的情報学科）

(2) 対象クラス：

生体医工学科／食品生命科学科、

第2学年（履修者数 41 名）

情報工学科／知的情報学科、

第2学年（履修者数 42 名）

このクラスは、1 年次にプレイメントテストの結果をもとに行ったクラス分けをベースに、1 年次の授業における出来具合を加味して新たにクラスを A, B, C に再編したグルーピングのうち、情報工／知的情報、生体医工／食品生命いずれも B に当たる層である。

4.2. 授業展開

4.2.1. 前半期

15 回の授業は、大きく前半と後半に分かれた内容となった。前半は、レシテーションの要件である徹底したテキスト理解に当てられた。この段階では、以下のような展開で毎回の授業が執り行われた。

1. 動画を見る（1 回分の対象は、基本 1 パラグラフ）

2. [居合 Listening]「準備せずに聞いてどれくらい聞きとれましたか？」

評価 1・・・さっぱり分からない (by 福山雅治)。	【理解度 30%未満】
評価 2・・・話題は何なのかぐらひは分かった。	【理解度 30～49%】
評価 3・・・要するに何がどうしたのかは分かった。	【理解度 50～69%】
評価 4・・・一部を除いてほぼ聞き取れた。	【理解度 70～89%】
評価 5・・・一字一句聞き取れた。	【理解度 90%以上】

3. チャンク訳で徹底解釈

Five years ago,	5 年前
I experienced a bit of	私はすこしだけ体験をしました
what it must have been like	きっとこんな風に違いないということ
to be Alice in Wonderland.	『不思議の国のアリス』のアリスになったなら。

Penn State asked me, a communications teacher,	ペンシルバニア州立大学からコミュニケーションの教師である私に依頼がありました
to teach a communications class	コミュニケーションの授業をするようにと
for engineering students.	工学部の学生相手に。

4. トレーニング（トレーニングの技を覚えていく）

- チャンツ（チャンク訳と並行してチャンツで音読していく）
 - スピードスピーチ（音読早読み練習）
 - シャドーイング（Melissa Marshall のモデルにかぶせる）
 - 一息読み（One-breath speech）（息継ぎ 1 回でどこまで音読できるか）
 - ピンポイントトレーニング（ペアで英→日→英、日→英→英・・・のような英文再生練習）
 - アウトラインスピーチ（スピーチの骨組みのメモを見ながら英文再生練習）
 - 遠距離絶叫スピーチ（Cry-out speech）（ペアで距離を取って大声で音読）
 - 中距離ささやきスピーチ（Whisper speech）（g. よりも少し近づいて、ささやきでスピーチ）
 - なんちゃって look-up-and-say（文末で視線を上げる音読）
 - マジモード look-up-and-say（覚えてから視線を上げる音読）
 - 役者気分で立ち稽古（台本読み）（ペアで感情を込めて音読練習）
5. [仕切直し Listening]（トレーニング後、どれくらい聞き取れるようになったか）

4.2.2. 後半期

上記のトレーニング込みの解釈作業は主に教師主導で授業展開がなされた。ペアワークでさえも、活動を指定し、キューを出して学生を動かしていた。後半期は、ペアワークに自主性を持たせる方向に転換した。毎回授業では、最初に Melissa Marshall のモデルの動画を見、チャンツで音読トレーニング（10 分程度）を施したら、ペアを組み、残りの時間をそのペアにゆだねた。出した指示は 1 つ。本時の目標の暗唱パフォーマンスをペア内で設定したら、パートナーがその目標に達するには何をしたら良いか、自分たちで決定してそのプランに即して活動を選択し、筆者（教員）が前半期で行っていたことをパートナーに対して自分が指導者になって実施していくことによって課題をクリアしていく。そこでの選択肢は、上記 4. のトレーニング技のレパートリーである。授業の最初に動画を見てチャンツトレーニングをした後は黒板に上記のレパート

リーを列挙し、そこから自分たちでその日に相応しい活動を選択する。

この授業では、スマートフォンの使用を許可した。それは、TEDにアクセスするためである。期の最初に「英語をマスターするための王道はザ・MOT（もっと）アプローチである」（三熊 2006）と指導した。「ザ・MOT（もっと）アプローチ」は“M”が模倣（*Moho*），“O”が音読（*Ondoku*），“T”が立ち稽古（*Tachigeiko*）を表す acronym であり、スピーチ 5 規範のうち記憶（*Memoria*）と所作（*Actio*）を遂行するアプローチである。スピーチの訓練は、構想（*Inventio*）、配列（*Dispositio*）、修辭（*Elocutio*）によってでき上がった原稿の音読（“O”ndoku）が基本であることは論を俟たないであろう。ところが、巷に氾濫する音読論に決定的に欠けているのが「模倣（“M”oho）」である。技能習得にはお手本（あこがれ）を重んじ、模倣する側面がある。この考えに則り、学生にはモデルを常にアクセス可能にするよう促した。そのための 1 つの方策が「スマートフォン」に Melissa Marshall のモデル動画をダウンロードし、暇さえあればそれを参照することである。後半期のペアワークにおいては、学生が必要に応じて自分たちのタイミングでスマートフォンを取り出し、Melissa Marshall を聞きながら互いにコメントし合っている姿が見受けられた。

これは、いわゆる「協同学習（collaborative learning）」の一形態であろう。鍵になる考え方は、自分ではなくパートナーが出来る様になる方法を模索する、ということであった。ただし、この協同学習はどこに向けて発動される取り組みだったのだろうか。

このあたりから、自らが舞台に立って発表する姿が明確にイメージ出来始めていた様に思われる。舞台とは、クラス内レシテーションコンテストである。14 週目に 8 人前後の 4 つのグループに分け、4 か所同時に予選を行い、学生間評価をさせ、それに録画したパフォーマンスの筆者の評価を加え、8 人のファイナリストを決定した。15 週目はその 8 人による本選を行った。これをコンテストにしたことには意味がある。それは、「祭り」としての学習での必要性である。少し長くなるが、以下引用である。

私は、英語を取り扱った「学習」そのものが普遍レベルにおいて、その完結を目指す道筋として「祭り」を必要としている、と考えている。まず、「祭り」は「非日常性」を豊かに湛えたイベントである。そこにはある種の昂揚感がなければならない。昂揚感は学習に参加し継続しようとする動機を刺激する要素である。教育心理学的分類でいうところの「内的動機づけ」に働きかける場の力ということになる。

次に、「祭り」とは「将来、〇〇のために…」などといった遠大なぼんやりとしたゴールではなく「〇月〇日の晴舞台に向けて…」という“short- or middle-term goal”を仕立てて展開される活動である。多くの教育現場で、「将来のため」という説得方法が幅を利かせている。大学入学と同時に「キャリアガイダンス」「自己発見」などと称して soul-searching を強要し、早い段階で将来を見越した「キャリア的」選択決定ができない者を不適格と非難する。「学習に真剣に取り組まないのは『将来』の『ゴール』がはっきりしていないからだ」と断ずる。しかし、私に言わせればそんな現実味を感じにくい先の見通しを根拠に今を制御できる勤勉さは希有なのであって、そうでない普通の若者が「それでも今すべきことをしっかりとやる」という構造と仕掛けを備えるということは、目的意識を強要し刷り込むことと同様、いやそれ以上に重要な教育機関の責務ではないかと考える。祭りはもっと現実味の実感できる（tangible）接近した「ゴール」である。そういうものがある時、とりあえず人は努力し、そこに参加しようとする。そういう意味では、かつて入試が「家族中、学校中、日本中を巻き込んだ祭り」だった。高校の 1, 2 年は真剣になれなくても、3 年になれば誰もが学習のギアを一段も二段も上げた。だから、方向が間違っていない学習については確実に学力がついた。そのような“short- or middle-term goal”を提供してくれるのが「祭り」とであると考える。（三熊 2011）

15 週目にレシテーションコンテストを設定することにより、授業が「祭りの準備」となった。「協同学習」というのは、このような中・短期ゴールを目指して力を合わせる「祭り」を設定することによって真の意味で実現するものではないだろうか。それは、多かれ少なかれ様々な過去の成功例の中に指摘されずに埋め込まれていると思われる。

5. 感想・振り返り

この授業では、期末試験の解答用紙上で特別英語 A 受講を振り返って感想を書いてもらった。任意での記述だったので、全員からの回答は得ていないが、生命学部クラスでは実質受講者数 34 名中 23 名（67.6%）、情報学部クラスでは 35 名中なんと 29 名（82.9%）が回答してくれた。トータルで 75.4% という高回答率であった。以下、そのまま記載する。

【情報】

01) この授業でスピーチの難さ（ママ）を知った。何も見

- ずに話すのは大変で自分の書いた文ですら難しい。文の構成を考えて話し、その構成を覚えようと思った。
- 02) この授業のおかげで英語の発音がひやくてきにのびました。この文章をすらすら言えるだけで気持ちいいです。だからもっと発音を自分で練習して TOEIC をやりたいと思います。
- 03) 最初は、単語の意味もよく分からず、ただ単に暗記するだけでいたが、本文を少しずつ覚えていくにつれ単語の意味も何となくですが理解できる様 (ママ) になりました。英語のスピーチは、苦手意識が強かったのですが、隣の人やグループで話しをしながらお互いに練習するのは楽しかったです。
- 04) 二回目の発表者をぎりぎりまで公開しない方が良かったのではないと思う。あれで自分はどうしてもやる気がそがれた。講義 (ママ) 内容は良かったと思う。
- 05) 並べ換え問題が理解しにくかった。
- 06) 英文を読んで理解できる場所は、暗記できたが、意味があまり理解できなかったところは、少し、暗記できなかったもので、両方を理解して、初めて、暗記できるんだなと思った。
- 07) 三熊先生のクラスになってとても良かったことは、プレゼンみたいな感じの発表がありはずかしくもありましたが、とても勉強になりました。少し自信もつき、とても良かったです。この半年間ありがとうございました。
- 08) 中学から英語を習い始めて、今までたくさんの先生方の授業を聴いて学習してきましたが、三熊先生の講義を聴き、初めて英語の楽しさを知ることができました。中学などの早いうちから先生の授業を聴くことができたなら、もっと英語が好きになっていたと思います。英会話ができるくらいこれからも英語を学んでいきたいと思いました。
- 09) 英語のスピーチを聴くことなんていままでなく、ましてそれを覚えるなど予想もしていなかったもので、よい経験になったと思う。
- 10) 授業内容はスピーチという形でおもしろかったです。もう一度やってみたいですが、単位は落とさたくありません。笑
- 11) これからも練習続けます。
- 12) この授業で、普段使っている単語の正しい発音を知ることができました。発音にはコツがあって舌の使い方が重要だと知りました。スピーチについてはたくさんの練習法があってごちゃごや (ママ) にもなりましたが、おかげでスピーチを最後まで言えました。
- 13) 授業は普通良いと思いました。
- 14) 暗記が苦手だったため、かなりの難題でした。日常生活の時間配分を整えるべきだったと後悔しています。まだまだ不十分な点がありますので、今後も継続して勉強していきたいと思います。
- 15) 長文のスピーチを暗記するのは初めてでしたが、自然に努力したつもりです。ですが、まだ思い出すことができなくなることもあるので、これからも続けていこうと考えています。
- 16) とても楽しい講義でした。文章は最後まで覚えることはできなかったけど、とても満足できる内容で良かったです。
- 17) 前期すべてを使ってスピーチをするのは、いままでになく良かった。ただ、今までのような授業も半分はあれば良かったと思う。
- 18) ベストスピーチ賞が取れるとは思いませんでした。全文を覚えるのはとても難しかったです。1日2日で何とかなるものではなく、少しずつを毎日繰り返すことが大切だと身を持って (ママ) わかりました。今回の英文は、特に and と that が多く使われていて、この2つの場所をきちんと把握することが難しく感じました。また、メリッサさんの様に4分弱で言うのは本当に難しく、1つ詰まると連続して詰まるので大変でした。まずは5分台で言えるよう頑張りたいと思います。
- 19) 耳が英語に少し慣れた気がしました。
- 20) ただ教科書を覚えるよりも楽しく授業にのぞめたと思います。最終ラウンドに出席しなかったので成績の方が心配になってしまいました。
- 21) 今までの講義 (ママ) とは違い、一つの文章をとことんやりこむという形で、自分は何が苦手なのか、得意な勉強方法は何だったのか考えるいい機会になりました。まだ、TOEIC は受けていませんが、結果のこせるようがんばろうと思いました。
- 22) 普通の授業とは一味違ったもので楽しかったです。ただ、機材のトラブルが多かった気もします。PC に直接動画を取り込んでおいてはどうですか。ありがとうございました。
- 23) 日本語で書かれている文だとすぐ覚えることが出来るのに、英語だと単語の意味が分からなかったりするので、とても難しかった。けれど、外人の英語を多く聞くことができたので、今までで一番英語を聞く力が増えたと思う。
- 24) 他とは違った「話す力」を伸ばせる講義 (ママ) で充実しました。
- 25) 最近になって日常会話レベルで英語が話せたらなあと思う出来事があったので更に英語を勉強する必要性があると感じました。先生に教えて頂いた方法で英語がスムーズに話すことができるよう練習していきたいです。努力の方法を教えてくださいありがとうございます。

た。

26) 私は、英語に苦手意識があり今日もうまくいきませんが、英語に対する新たな（ママ）アプローチの仕方ですととてもためになりました。まだメリッサマーシャルは、覚えきれてないので少し続けてみようと思います。また、最近授業を受けてから洋画のハリーポッターを字幕でみるようになりました。この映画は日本語版は何度もみているのでメリッサマーシャルのように挑戦したいと思いました。

27) 三熊先生の授業は、おもしろくて、分かりやすかったです！

28) 発音練習が様々で非常にためになりました。

29) メリッサを覚えるときの方法が見る、聴く、話すという、様々な所を使いながら覚えたので非常に覚えやすかった。実際のスピーチは緊張したが、人前で話すことの厳しさを痛感した。

【生命】

01) 英語のスピーチは久しぶりだったのでとても緊張しました。4月5月あたりは授業がとても眠たかったけど理解して覚えた文が多くなってきた6月7月あたりは彼女のスピードについていけるのが実感できた。まさか大学でも英語のスピーチをやるとは思わなかったので発音は誰よりも頑張ろうと思って毎日TEDを聴いたかいあってベストスピーカー賞？をもらったので刺激になりました。

02) 自分でもびっくりするぐらいけっこう時間がたった今でも覚えていた。

03) 覚えるの頑張ったんでいい評価下さい。

04) 今回の英語では、スピーチで英語を書くのではなく英語を聞く話すの方が多く、英語に普段なれてなかったけどこの講義で英語を聞きなれることが出来た。バイトでも英語で話しかけられたりするので、それがだんだん聞きとれるようになってきたりと、英語にふれることが多くなったと感じた。でも、英語を覚えて話すのはまだまだ苦手であると感じたスピーチの内容も難しく、まだ自分で英語を理解するのは苦しいと思った。

05) プレゼン覚えるのが大変でした。

06) 三熊先生の授業は初めてでした。1つの長文を覚えて発表すると聞いたときは、とても嫌でした。しかし、リズムにのって口に出して言ったり、何度も聞いたり、ペアと一緒にしたり、いろいろな方法で行ったので、すぐにおぼえることができました。発表するのはとても苦手で緊張しました。けど何度もくりかえしおぼえたので緊張した中でも、全文、暗唱することができました。そしてテスト前に何も見ずに暗唱してみると、全部おぼえて

いました。リズムにのって暗記するのは初めてでしたが自分にはとても合っているおぼえ方だと分かりました。三熊先生の授業はつねに声をだしていたので、ねむくならなかったし、とても楽しかったです。ありがとうございました。

07) できる限り覚えました。もうこれが全力です。ほんとは一生懸命覚えました。でもテストをやるとところどころ覚えてないです。次また、このような授業だったら優秀（ママ）してやりたいと思います。

08) スピーチはもうやりたくありません。

09) 最初はたいぎいと思ってはじまったメリッサ・マーシャルがやってるうちにしだいに楽しくなってきた英語を楽しめている自分にビックリしました。先生には感謝しています。ありがとうございました。

10) 漸（ママ）新たな授業展開でおもしろかった。

11) 最初は無謀だと思っていたが、毎日、少しだけ読むだけでも、それを連み重ねたら、いつの間にか、覚えていた。全体の前で発表するまでの一週間、一日、一回しか読まなかったが、すらすら読めるころまで、これだ。慣れが一番大切だと感じた。

12) 長文の英語を覚えるのが難しい内容で大変だった。

13) 前期お世話になりました。ありがとうございました。

14) スピーチの練習をもう少しすればよかったと思います。最近、すこしきとれるようになったきがします。

15) 英語の授業が楽しかった。

16) 英語とても多くの量を暗記するという経験がなかったので最初はとまどい、できるか不安だったけど、がんばって覚えて、自分の力になれた気がしました。ありがとうございました。

17) 英語の暗唱は難しかったけれど、覚えて言える様になれたのは嬉しかった。もっと早くに準備を始めておけばよかったと思った。楽しかったです。

18) 授業はおもしろかったけど、実際、英語がみについたとは思わなかった。

19) 発表のときの評価表の「ショボ」と「神」を逆に書いていた気がします。すいません・・・。Talk nerdy to me!!

20) TOEICの練習は何をしたらいいのかわからない。

21) 初めて英語のスピーチをしたので大変勉強になりました。何度も聞くと、発音の仕方も少しずつ分かってきました。スピーチテストの時は、精神的弱さから、頭が真っ白になってしまいましたがいい経験ができました。

22) 英語を身につけることができるよう、努力していきたいです。

23) 今回、この基礎英語Aを受講して、TOEICにおいて必要であるリスニングを鍛えるきっかけとなる講義で

あったと思います。この講義で利用したメリッサ・マーシャルのスピーチにより英語を聞く力が多少なりとも身に付いたと思います

6. 分析

上記の記述を、情報学部のクラス分は情-01, 情-02・・・, 生命学部分は生-01, 生-02・・・のように番号を振り直してまとめた上で、仕分けを試みた。

【喜び：楽しかった／スピーチ・プレゼンが面白かった】

情-03, 情-10, 情-13, 情-16, 情-20, 情-22, 情-27, 生-06, 生-09, 生-10, 生-15, 生-17 (計 12 名)

【続けたい／もう一度やってみたい】

情-08, 情-11, 情-14, 情-15, 情-26, 生-22 (計 6 名)

【刺激／いい経験になった】

情-07, 情-09, 情-17, 情-21, 情-28, 生-01, 生-21 (計 7 名)

【覚え方、努力の仕方がわかった】

情-01, 情-06, 情-18, 情-25, 情-29, 生-02, 生-11, 生-16 (計 8 名)

【英語力向上の自覚：耳が英語に慣れた／発音が向上した】

情-02, 情-12, 情-19, 情-23, 情-24, 生-04, 生-14, 生-23 (計 8 名)

【難しさ／苦手意識 克服してないかも・・・】

情-05, 生-05, 生-07, 生-12, 生-20, 生-18, 生-08 (計 7 名)

【その他】

情-04, 生-03, 生-13, 生-19 (計 4 名)

最初のカテゴリー【楽しかった／スピーチ・プレゼンが面白かった】において特筆すべきは情-03, 生-06, 生-09の記述にあるように「苦手意識が強かった」「とても嫌でした」「たいがい(億劫)と思ってはじまった」という状態から出発して、英語学習の喜びを体験することができたという点である。英語に対して苦手意識を持っている学生が多いのはこの学生たちの告白を参照せずとも自明なのだが、そんな状況でやはり何らかの結果が出るまで続けることは重要である。願わくば「何らかの結果」が英語学習理論上妥当なものであれば言うことはない。次は【続けたい／もう一度やってみたい】と概念化されたカテゴリーであるが、前のカテゴリーの要諦が「何らかの結果が出るまで続けること」であったのだから継続の意思を表明

するカテゴリーとの間で連動が見られると言えよう。【刺激／いい経験になった】のカテゴリーでは「ためになった」「勉強になった」との記述が見られる。また次のカテゴリー【耳が英語に慣れた／発音が向上した】は明らかで具体的な英語力向上の自覚である。これら2項目は、上記【楽しかった／スピーチ・プレゼンが面白かった】のカテゴリーで言及した「何らかの結果」が妥当性を兼ね備えているということの一つの証左であろう。【覚え方、努力の仕方がわかった】についても同様で、努力の方向が正しく操舵されていれば後は続けるだけである。その点に学習者が気が付いたことの意義は大きいといえる。ただし、【難しさ／苦手意識 克服してないかも・・・】と思われる記述もわずかではあるが存在する。ここに配された7名のコメントは回答数では13.5%にあたる。10人いれば1人は効果を感じずに終わったことになるし、無回答の17名を仮に全員【難しさ／苦手意識 克服してないかも・・・】のグループに換算したとすると34.8%、すなわち10人中3人は少なくともポジティブな心持ちで終わることができなかった可能性がある。その点は記述しておかなければなるまい。しかし全体の基調としては、全編レシテーションという大胆な方策を中間層のクラスに対してとった結果としては、7割弱の好意的レスポンスは評価に値すると言えよう。

7. まとめ

1番典型的な学習者像を代表していると思われる、最上級クラスではないクラスでこの「祭り」を実施したことには意味があると考えている。それは、様々なクラスでの発展性を暗示するからである。

しかし実は今回、報告を前提とせずに4月に特別英語Aをスタートさせた。そのため、数値という形でデータを取っておらず、報告のレベルを大きく超えていないことは反省点である。もう少し精緻な研究計画に基づいた論考が提出できるならば、「祭り」思考の「協同学習」がより力強く提案できるであろう。

それでも、前述の通り発展可能性、応用可能性の一端は示すことが出来たと考えられる。それはすなわち、レシテーションという形態に縛り付けるものではないということも合わせて申し添えておく。

「非日常」を参加者が意識する実践共同体において、「短・中期的ゴール設定」のもと特定の技芸の披露の応酬を期待される活動を立案、実行してゆく「コミュニティの発展的再生産」というのが私の考える「祭り」の定義である。(三熊 2012)

この定義に則る活動を演出することが出来るなら、それは「祭り」である。レシテーションでなくても構わない。授業で祭りを興すことは可能である。「学習」が「祭りの準備」

なら、「教育」は「祭りのお膳立て」である。場を与えること、そしてその場のコミュニティーにおける意味を語り、発信し、共有することである。それこそが我々の仕事であるという認識を新たにされたのが、今回得た示唆であった。

本研究は科研費（26370648）の助成を受けた研究の一部である。

参考文献

内田樹. 『街場の教育論』東京 ミシマ社 2008.

江川泰一郎. 『英文法解説 改訂3版』東京 金子書房 1991.

近江誠. 「音読・レシテーション・スピーチ」『現代英語教

育』32.7, 1995. 8-11.

緒方勲監修. 『英語音声指導ハンドブック』東京 東京書籍 1995.

小川芳男ほか編. 『英語教授法辞典』東京 三省堂 1982.
佐藤洋一. 「理系英語の発想法と英語学習へのメリット」『英語教育』57.3(2008):10-13.

田邊祐司. 「『レシテーション』のススメー思い入れレシテーション論」『現代英語教育』32.7, 1995. 12-15.

三熊祥文. 「*Memoria* 再考—英語教育におけるスピーチの縦糸と横糸」広島文教女子大学紀要 第35巻 pp.57-72
—. 「『もっと・アハ』でスピーチ」『英語教育』55.12, 2006. 28-29.

Appendix 3 Melissa Marshall: Talk nerdy to me

Yoshifumi Mikuma

Five years ago, I experienced a bit of what it must have been like to be Alice in Wonderland. Penn State asked me, a communications teacher, to teach a communications class for engineering students. And I was scared. (Laughter) Really scared. Scared of these students with their big brains and their big books and their big, unfamiliar words. But as these conversations unfolded, I experienced what Alice must have when she went down that rabbit hole and saw that door to a whole new world. That's just how I felt as I had those conversations with the students. I was amazed at the ideas that they had, and I wanted others to experience this wonderland as well. And I believe the key to opening that door is great communication.

We desperately need great communication from our scientists and engineers in order to change the world. Our scientists and engineers are the ones that are tackling our grandest challenges, from energy to environment to health care, among others, and if we don't know about it and understand it, then the work isn't done, and I believe it's our responsibility as non-scientists to have these interactions. But these great conversations can't occur if our scientists and engineers don't invite us in to see their wonderland. So scientists and engineers, please, talk nerdy to us.

I want to share a few keys on how you can do that to make sure that we can see that your science is sexy and that your engineering is engaging. First question to answer for us: so what? Tell us why your science is relevant to us. Don't just tell me that you study trabeculae, but tell me that you study trabeculae, which is the mesh-like structure of our bones because it's important to understanding and treating osteoporosis.

And when you're describing your science, beware of jargon. Jargon is a barrier to our understanding of your ideas. Sure, you can say "spatial and temporal," but why not just say "space and time," which is so much more accessible to us? And making your ideas accessible is not the same as dumbing it down. Instead, as Einstein said, make everything as simple as possible, but no simpler. You can clearly communicate your science without compromising the ideas. A few things to consider are having examples, stories and analogies. Those are ways to engage and excite us about your content.

And when presenting your work, drop the bullet points. Have you ever wondered why they're called bullet points? (Laughter) What do bullets do? Bullets kill, and they will kill your presentation. A slide like this is not only boring, but it relies too much on the language area of our brain, and causes us to become overwhelmed. Instead, this example slide by Genevieve Brown is much more effective. It's showing that the special structure of trabeculae are so strong that they actually inspired the unique design of the Eiffel Tower. And the trick here is to use a single, readable sentence that the audience can key into if they get a bit lost, and then provide visuals which appeal to our other senses and create a deeper sense of understanding of what's being described.

So I think these are just a few keys that can help the rest of us to open that door and see the wonderland that is science and engineering. And because the engineers that I've worked with have taught me to become really in touch with my inner nerd, I want to summarize with an equation. (Laughter) Take your science, subtract your bullet points and your jargon, divide by relevance, meaning share what's relevant to the audience, and multiply it by the passion that you have for this incredible work that you're doing, and that is going to equal incredible interactions that are full of understanding. And so, scientists a'hen you've solved this equation, by all means, talk nerdy to me. (Laughter) Thank you. (Applause)

